

令和3年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

| 視点 | 4年間の目標 (令和3年度策定) | 1年間の目標 | 取組の内容 | | 校内評価 (前期) | | 学校関係者評価 (12月8日実施) | 総合評価 (2月21日実施) | |
|----------------------|--|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 具体的な方策 | 評価の観点 | 達成状況 | 課題・改善方策等 | | 成果と課題 | 改善方策等 |
| 1 教育課程 学習指導 | <p>①工業に関する専門教科・科目を中心に、理数教育及び外国語教育の充実に注力した教育課程編成を行う。</p> <p>②グローバルコミュニケーション能力育成のための教育のさらなる検討を行う。</p> <p>③創造的な問題解決力を育成するために、生徒が主体となる双方向授業を展開する。</p> <p>④実践的・体験的学習を重視して、自ら課題を発見し解決するための力を育む授業改善を実施する。</p> | <p>①令和4年度入学生の新教育課程編成表の導入を見据えて、各教科で使用する教材等の工夫と充実を図る。</p> <p>②実用英語技能検定試験対策として進めていた外部講師による英語講座の充実を図る。</p> <p>③④知的財産学習を通して、社会と技術のつながりについて理解を深めさせるとともに、課題発見・解決するための実践力を育成する。</p> | <p>①令和4年度に向けて、生徒に身に付けさせたい資質・能力の育成に繋がる教科書・副教材を選定する。</p> <p>②昨年度まで年1回実施していた講座(1次・2次試験対策)を年2回に増やす。</p> <p>③④生徒が身近な課題を工学的視点で捉え、課題の発見・解決できるよう教科横断型の授業計画を立てる。</p> | <p>①適切な教科書・副教材を選定できたか。</p> <p>②講座を受講している生徒と受講していない生徒の実用英語技能検定試験の合格率の比較。</p> <p>③④知的財産学習アンケートについて理解が深まったと答えた生徒が20%以上増加したか。3学年課題研究への接続が円滑にできたか。</p> | <p>①教科書については、無事に選定することができた。副教材については、引き続き選定を行っている。</p> <p>②無事に夏季外部講師による英語講習(1次・2次)を実施した。</p> <p>③④アイデア出し・まとめ・共有によるプロジェクト型学習を通し、知的財産学習を展開することができた。また、通常授業とオンライン授業とを併用しながら、計画通りに進めることができた。</p> | <p>①副教材の選定については、令和4年度からの新教育課程導入に向け、適切な選定を行う必要がある。</p> <p>②2回目となる秋季外部講師による英語講習(1次・2次)を実施する。</p> <p>③④知的財産学習の前後でアンケートを取った結果「理解が深まった」と答えた生徒は学習前49.1%から学習後78.3%に増加した。共通教科と工業科の連携を通して、生徒にとって気づきの多い内容とすることができた。</p> | <p>創立110周年おめでとうございます。御校の記念誌を拝見し歴史と伝統を改めて認識いたしました。</p> <p>学校評価報告書から、御校の教育方針や育成する生徒像が推察されます。また表彰者一覧から多岐に渡る分野で生徒さんが活躍されていることが分かります。</p> <p>今後とも共に協力し合いながら教育活動を進めさせていただきますたく思います。</p> | <p>①令和4年度に向けて、新教育課程と旧教育課程の教科書・副教材を混乱なく無事に選定することができた。また、令和5年度も並行して、新・旧の教育課程が実施されるため、教科書・副教材の選定にあたっては、ミスや混乱が起こらないようにする。</p> <p>②昨年度まで年1回で実施していた講座(1次・2次試験対策)を年2回に増やした。合格率は、現時点でまだ生徒の結果が出ていないため、比べられていない。 来年度、本校に「スタディサプリ」が導入されるので、既存の「外部講師による英語講習」と融合したり、住み分けたりして、生徒の学習活動に活かしていくかが課題である。</p> <p>③④年間を通して工業科と共通科との教科横断型プロジェクト型学習を展開することができた。また休校時には通常授業とオンライン授業とを併用することで柔軟に対応することができた。課題として新カリキュラムにおいて、時間割の関係上、2年次課題研究の展開について計画を検討する必要がある。</p> | <p>②令和5年度の教科書・副教材の選定においても、新・旧それぞれの教育課程の科目を把握する。さらには、生徒に身に付けさせたい資質・能力の育成に繋がる選定ができるように、教職員に周知徹底を図る。</p> <p>②「スタディサプリ」の利用を促進するために、生徒向け、保護者向けや教員向けの研修会を行う。また、「スタディサプリ」を進路や学習活動に活かしていけるようにする。</p> <p>③④企画研究グループと工業4科で、新カリキュラム対応にした2年生課題研究の内容を検討する。また課題発見解決能力の育成するため、企業と連携した人材育成プログラム(富士通総研 ReBaLe)の導入についても併せて検討する。</p> |
| 2 (幼児・児童・)生徒指導・支援 | <p>①多様性を理解し、来たる国際社会の一員として活躍できる人間性の育成を図る。</p> <p>②リーダーシップや協働意識を養い、生徒の人間性の育成を図る。</p> | <p>①講演会や個に応じた支援体制を通じて、自他の理解を深め、それぞれに応じた成長に寄与する。</p> | <p>①計画的な講演会の実施。</p> <p>②基本的な生活習慣指導や学習・日常の生活での困っている生徒への個別な対応を通して、生徒を支援する。</p> | <p>①計画した研修会を実施できたか。</p> <p>②年間の予定通りに生活習慣指導を実施できた。</p> <p>①学習・日常の生活での困っている生徒の情報共有と検討・対応ができたか。</p> | <p>①7月に多様性講演会、デートDV講演会を計画通りに実施することができた。</p> <p>②4月・5月・6月・7月に登下校指導、校外巡視を計画的に実施できた。また、昼食時の感染防止対策を実施した。</p> | <p>①例年同じ講演会を実施しているが、生徒の実情に合わせた講演内容となるよう検討している。</p> <p>②今後も同指導を継続するとともに多くの職員で指導に当たる方策を実施の予定である。</p> | <p>生徒の実態を踏まえ視野の広がりとしての啓発的活動の重要性を感じます。多様性講演会、デートDV講演会、自死に関する知識を深める講演会など。コロナでストレスを抱えやすくなっている青年期の生徒の人間形成に向き合っていこうとする姿勢を感じます。</p> | <p>多様性、デートDV、薬物乱用防止、スクエアドストレート型安全教室、性教育、携帯電話の利用など、生徒の日常生活で抱える疑問や悩み、危険性に関する様々な講演会を企画実施できた。また、職員対象に自死に関する修会を開催し自死に関する理解を深めることができた。</p> <p>登下校指導、校外巡視を月例で実施し、日常生活における生徒の生活習慣の確立に寄与できた。</p> <p>定例の教育相談会議を実施し、困り感のある生徒の情報を収集し、共有することができた。</p> | <p>生徒の多用性により、今の生徒いどんな講演会が有効であるかをアンケート等の結果から分析し、講演会のバージョンアップを検討する必要がある。</p> <p>工業高校の特性上、教員が生徒情報を共有する必要性が低いいため、特に他科の情報が入りにくい特性がある。そのため、科の代表が教育相談会議に参加し、情報を共有する工夫をしているが十分浸透していないのが現状である。引き続き情報共有につとめたい。</p> |

| | 視点 | 4年間の目標 (令和3年度策定) | 1年間の目標 | 取組の内容 | | 校内評価(前期) | | 学校関係者評価 (12月8日実施) | 総合評価(2月21日実施) | |
|---|--------------|---|--|--|--|---|---|---|--|--|
| | | | | 具体的な方策 | 評価の観点 | 達成状況 | 課題・改善方策等 | | 成果と課題 | 改善方策等 |
| 3 | 進路指導・支援 | 生徒のキャリア発達を、正しい勤労観や職業観に基づく進学する意味や就職する意味について、十分に理解した段階まで引き上げる。 | 新しい学校目標に対応し、1学年～3学年まで体系的に生徒のキャリア発達を促す事のできる進路行事を企画する。 | 昨年度まで行っていた「学年進路ガイダンス」を、新たに「学年進路セミナー」と命名し、内容を一新する。 | 体系的に生徒のキャリア発達を促す事のできる「学年進路セミナー」を立ち上げる事ができたか。 | 昨年度までの「進路ガイダンス」を新たに「進路セミナー」と名称変更し、体系的な進路指導ができるように内容を組みなおした。今後、7月、12月、3月に実施する予定である。 | 1学年では、各教室に担当講師が出向く形の講義、2学年では、希望する各部屋(大学・企業)に生徒が分かれて、講義を受ける形で行った。さらに細かい内容に触れると、1学年では、担当講師が直接教室に出向いていたものを、生徒が担当講師をお迎えに行く形に変更した。 | 神奈川県工業高校は地域との結びつきが強く、美学のもとキャリア教育に力を入れておられるものと拝察いたします。高等学校のキャリア教育を牽引すべく取り組んでいただくことを期待しております。 | 生徒対象に行っている大学・専修学校・企業をお招きしての「進路セミナー」は、今年度で完成形に達したと考えている。今後は、保護者向けの進路説明会の充実を図っていきたい。また、来年度から導入される「スタディアプリ」をどう活用するかが今後の課題となる。 | 今年度まで行っていた3学年保護者対象の進路説明会を、1学年及び2学年の保護者にも拡大して、生徒だけではなく、保護者の進路への意識も醸成したいと考えている。「スタディアプリ」の進路の項目の利用に関する研修会を、生徒、教員及び保護者にも拡大して実施し、新しい資源を最大限活用できるようにしていきたい。 |
| 4 | 地域等との協働 | ①各種連携や地域との協働を通じた生徒の創造的な問題解決力を養う。 ②専門高校の教育内容や理工系進路においての他学科に対する有意性を地域や中学生に理解してもらう。 | ①産学官連携による授業や企画を通し、生徒の興味・関心を高めると共に、実践的な課題解決力を育成する。 ②地域・中学生のニーズを反映し、広報活動を企画・実践する。 | ①かながわP-TECH事業等を活用し、産学官連携による企画を実施する。 ②新入生にアンケートを取り、広報計画に反映させる。広報関連の企画は感染対策をして、可能な限り実施する。 | ①生徒の専門技術に関する興味・関心を高めると共に、実践的な課題解決力を育成することができたか。 ②広報計画に基づいて効果的に広報ができたか。 | ①大型モニター、プロジェクトを活用しオンラインでの講話会を実施することができた。生徒アンケートでは有意義であったとの感想が大半であった。 ①新入生のアンケート結果から教育課程、施設設備、進路について関心が高く、インターネットでの情報収集していることがわかった。 | ①来年度は電気科1学年に加え、2学年の情報系の選択者を対象とした講座も行われるため、その計画について産学官連携を通し立案する。 ①新型コロナの影響によりTECH LABは実施できなかったが、学校説明会を追加開催することで滞りなく広報活動を行うことができた。 | コロナでご苦労が多い中、諸行事をできるだけ実施するよう運営して来られたとのこと、ご苦労様でございます。 新型コロナウイルスまん延防止対策をしつつ、かつ諸行事をできるだけ実施することは大変かと思いますが、尽力に敬意を表します。 | ①年間4回の生徒向けオンラインを活用したP-TECHプログラムを実施することができた。プログラムを通じて初年度の計画通り生徒の国際的および技術的な視野を広げることができた。 ②感染防止対策を徹底し、学校説明会を年間で4回開催することができた。今後は各工業科と連携を取り、SNSを使った広報に力を入れていく。 | ①企業と連携し、来年度以降の実施計画の検討を行う。また校内でも実習におけるIT分野の内容についても併せて検討する。 ②中学生のSNSの利用状況の調査や学校の公式SNSの展開について整理・調整を行う。 |
| 5 | 学校管理 学校運営 | ①創造的な問題発見・解決能力及び先端技術活用力を養う教育活動のための環境について、より一層充実させる。 ②生徒と向き合う時間を確保するために、組織的な学校運営と校務の効率化を図る。 | ①ICTを活用したオンデマンド授業等の環境整備を継続して行う。 ②校務の効率化を図るために、校内の会議資料のペーパーレス化を進める。 | ①ICTを活用した課題の配付・提出やオンデマンド授業が行えるように環境整備を行う。 ②タブレットを利用して、ペーパーレス会議を行う。 | ①G Suite等により、多くの教員が日常的にICTを活用した授業を行えたか。 ②企画会議や職員会議でタブレットを利用したペーパーレス会議が実施できたか。 | ①タブレット(Chromebook)を全職員に配付し、分散登校期間中にオンデマンド授業を積極的に実施した。 ②グループ会議や企画会議のペーパーレス化およびオンラインによる職員会議を実施した。 | ①職員個々のスキルに差があるため、全員が日常的にICTを活用できているわけではないので、研修や説明会を継続的に実施する必要がある。 ②オンライン会議用のイヤホンマイク等の細かな備品をそろえていく必要がある。 | ICT活用については、教育現場がまさに激変の最中にあると思われ、先生方に自身も新しいことへの柔軟な対応を迫られ、ご苦労が多いかと思えます。 不祥事ゼロプログラム検証について、実施には負担もあるかと思いますが、問題を未然に防ぐ非常に良い取り組みとと思います。その実施形態がグループごとに多角的に行われているのも有意義化と思えます。 | ①多くの職員が日常の授業でもタブレットを使用し、ICTを活用した授業を実施できるようになった。また、欠席した生徒に対してもオンラインによる同時配信授業を実施し、生徒への教育の補償を行った。しかし、まだまだ全職員が日常的にICTを活用できていない状況もある。 ②グループ会議をペーパーレスだけではなくオンラインで実施するグループもあり、会議時間の短縮ができ、生徒と向き合う時間が増えた。また、オンライン職員会議では、回数を重ねるにつれ職員も操作に慣れ、スムーズに会議が実施されるようになった。しかし、備品の問題や会議での職員間のコミュニケーションの取り方が課題である。 | ①全職員向けの研修や説明会のみではなく、日頃からICTの活用に慣れている若手職員が操作に不慣れな職員をサポートできるような体制を構築する。また、長期休業中に生徒に対しオンライン講習会等を実施する。 ②必要な備品のについては、引き続き県へ備品の要求をする。また、オンライン化に伴う職員間のコミュニケーション不足の解消については、一般企業でも問題となっていることなので、情報を収集しつつ教育現場に即した新たなコミュニケーションの取り方を模索して行きたい。 |